武德成業

一

内閣文庫
番號 和 15251
冊數 63 (1)
函號 150 12

内閣文庫
和書
一五〇函
六
一五二五一
四三
架 冊 紙 類

150-12

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

武德成業凡例

凡歷代 國家の記録と稱せるもの世に多く流布せるものをもれし武將感狀記

勇士一言集抄等は刊本よりも精選なるものに所以殊に感狀記は戰場の趣旨をよく書取るものゆへ此集乃信據とし清正記是亦印刻の書にて朝鮮の一戰の中に浅記をもゆへ考訂を加へるもの也

一古人物語武功實録なるものの或人の所藏なる

内閣文庫
浅草文庫

成請得たりとて是ふ事跡正しく實録なるもの有る專ら撰て入る

一柏崎物語八享保元文乃間柏崎三郎右衛門と云へる浪士 國家の事跡を多く傳承し處くにて講せし由聞伝へといへども三郎右衛門下世し後著述なるものなる故撰ハ世ふ伝ふる事なし聞記せしものなりと旁索せしに能勢市兵衛といふ者三郎右衛門講席ふて書留しものなる成聞伝へ多くなる息市十郎ふ多く其聞記なるものと得たりしに草書ふ書記し誤謬たる多し蠹魚の祟ひ且錯乱なれる故なる是正ふ撰ふ侍へ大坂覚書八予兵術の師象水先生の所為なる成聞撰て入る此二書を世ふ藏ふる者ま撰也

一古諸書ふ外武徳大成家忠日記武徳安民記駿河土産落穂集天元實記祐天物語岩淵夜話翁物語武家閑談續武家閑談駿府政事録明良洪範武林叢話古諺記老人雑話松平物語時代記武邊咄抜書武隠

叢話武邊咄のごとくは悉信用するがごとし
とも皆雙言校より備るなる也
一凡此集異同裁しがたき不低書しるす両説を挙
すべし又或ハ諸名家の傳記を記すに其章々事跡
に時代矛盾するひとり是又低書しるすなり
是ごとの是と詳よせよ

寛政五年癸丑冬十二月

伯耆守従五位下藤原朝臣加藤正脩識

武德成業卷之一

伯耆守加藤正脩編

武德大成

天文十一年壬寅十二月廿六日　東照大神君三河國岡崎ノ城ニ誕生マシマス御幼名　竹千代君　御母ハ刈屋ノ城主水野右衛門大夫忠政女ナリ酒井雅樂助正親胞刀ヲ獻シ石川安藝守清兼墓目ヲ役ス御誕生ノ時様々ノ瑞兆有御生レ付人ニ勝レ御容顔唯人ナラス高祖父　長親君是ヲ見給ヒテ御悦不斜此兒能譽レヲ天下ニアケントノタマ

フ

天文十二年癸卯七月十二日刈屋ノ城主水野右衛門大夫卒去

家忠日記

法名大溪賢雄

武徳大成

其子下野守信元刈屋小川両城ヲ合セ領シテ今川義元ニ叛キ心ヲ尾張ヘ通ス　廣忠君是ヲ聞給ヒテ今川家年來我ニ懇遇セリ其恩可忘哉然ルニ今下野守ト内縁絶サル時ハ義ニ不叶依之止事ヲ得不給　夫人ヲ刈屋ヘ送リ歸シ給ハレトス時ニ　夫人病ニ罹レリ　廣忠君酒井雅樂助ニ命シテ彼宅ニ置テ　夫人ノ病ヲ療養セシム日ヲ經テ　夫人ノ病快復シ玉ヒ岡崎ヲ發ス

家君ハ三歳ナレハコノ離別ハ天文十三年ナリ

竹千代君其時ニ三歳ニ成ラセ給フ　夫人別レヲ惜ミ給ヒテ涙ヲ拭テ岡崎ヲ發ス淺羽氏金田氏二十余騎是ヲ送リ奉ル刈屋ヘ近付ケル頃　夫人淺羽金田ニ云ラク我ヲ捨テ早ク岡崎ヘ歸ルヘシト淺羽金田附從ハレト請フ又曰下野守ハ猛キ生レ付ニテ短氣成人也我歸ルヲ聞ハ憤怒テ汝等ヲ殺スヘシ汝等防ク共多勢ニ圍レハ防キ難カラン我　廣忠君ニ別レ奉ルトイヘトモ竹千代君岡崎ニ居給ヘハ岡崎ノ事心ニ不忘　竹千代君成長ノ後汝等命ヲ全フシテ忠義ヲ盡スヘシ　竹千

君ト下野守舅姪ノ好ミアル時ハ遂ニハ和睦アルヘシ今汝等故ナクシテ死シ両家ノ怨ヲ深クスル時ハ重テ和談ノ妨トナルヘシ然ラハ我再ヒ　竹千代君ヲ見ルヿアタハシ此言ニ依テ淺羽金田強テ乞事アタハス刈屋領内ノ郷民ヲ尋出シテ　夫人ノ輿ヲ舁セテ云ク是下野守　御妹也故有テ刈屋ヘ歸リ給フ汝等謹テ是ヲ送リ奉ルヘシ何茂請合ケレハ淺羽金田別レヲ告テ歸リ去ル未イクハクナラサルニ下野守數百騎ヲ出メ三河ノ送使ヲ殺シトス何レモ退去ニ依テ空ク歸ル人皆　夫人ノ思慮ノ深キヲ感ス此後　夫人再ヒ尾州知多郡阿古屋郷主久松佐渡守俊勝ニ嫁シ給ヒテ男子三人女子三人ヲ産テ其一男ハ三郎太郎ト云後ニ因幡守康元ト號ス其次男ヲ源三郎ト云後ニ豊前守義勝ト号ス其三男ヲ長福ト云或ハ三郎四郎ト稱ス後ニ隠岐守定勝ト号ス其長女松平伊豆守ニ嫁ス其次女松平丹波守康長ニ嫁ス其三女ハ松平玄蕃頭家清ニ嫁ス三人ノ男子後ニ松平氏ヲ賜リテ御兄弟ニ准ス

天文十二年癸卯八月内藤甚藏善敖（後甚五左衛門ト号ス）阿部大藏少ニ依テ　廣忠君ニ附忠義ヲ勵シ事ヲ請フ　廣忠君其志ヲ

感し給ヒテ書ヲ授ケ且米地ヲ賜フ

家忠日記

今度大変之為無方出陣之時為給地百貫文之進雲
紙之書付田地拾石者之給ふ不入小進仕無相違之旨令
拝領之畏入之由百貫之首尾之可仕親仕妻相阿大ゝ子仕之旨
之本書之仕形入之仕未代給地之ハ遠仕仍如件

天文十二年　　岡三　廣忠
八月十日

内蔵助殿

十月三日松平内膳正信定卒

武家閑談

天文十二甲辰二月二日松平御父　廣忠君御産想小

神ゝ此長さう紀世とちるかれ萩仕んつちゝ代行仕宿
右仕歌と今仕後再小書松仕萩小付く来ること見て爰さ発ちり
廣忠君小思仕ゝ二列大涙仕稱名寺十之世の其沙小
上人小仕ゝ成板ゝ小思仕の爰ゝ行小男称名寺上人参り目
出度仕爰想小可ゝ之ゝ拝文　　行ゝ代殿尚年二歳小成り
ゐ小行未整業新小所小行ゝすと祝ひの百頭典行ゝ行り称名
寺上人中ゝ之を仕成小
ゐをゝゝゝこゝゝ仕用ゝ仕ゝ仕ゝ
右ゝ仕爰想小ゐ遠近百年を年ゝ御繁昌なり

家忠日記

七月九日洪水陸地舟行カ如シ三州ノ民屋多ク漂蕩ス五畿七道モ又是ニ同シ

八月廿一日　長親君（廣忠君曾祖父）逝去法名　掉舟院一閑道閲

武德大成

天文十三年甲辰織田彈正忠信秀今年八月　長親君逝去有テ岡崎安カラスト聞テ織田左馬允敏宗ヲ大将トシテ三千余騎ヲ卒シテ安城ヲ攻シム城兵固ク守テ是ヲ防ク平岩十兵衛矢ヲ放テ織田敏宗カ股ヲ傷ク依之織田カ兵士敗軍ス織田信秀大ニ怒テ自ラ兵ヲ卒テ安城ヲ拔ク直ニ伝崎ヲ攻ントス時ニ松平三左衛門伝崎ヲ守テ心ヲ信秀ニ飜シテ岡崎ヲ討ントス是ヲ聞者各相疑フノ心ヲ抱ク　廣忠君始思ラク援ヲ遣シテ三左衛門ト共ニ信秀ヲ挾討シト然レ共三左衛門逆心セルニ依テ唯岡崎ヲ守防キ戦フノ備ヲナシ給フ此頃酒井将監ト石川安藝守酒井雅樂隙アリテ好カラス将監此時ヲ幸トシ　廣忠君ニ告テ曰安藝守雅樂助權勢日日ニ大ニシテ私曲有是ヲ放チ退ケハ諸士ノ疑ヒ悉ク解ント　廣忠君聞給ヒ将監カ自分ノ怨ヲ遂ントスルヿヲ咎ム将監言フ能ハスシテ退ク　廣忠君累代ノ臣タルヲ以テ是ヲ退ケス安藝守雅樂助モ怨ヲ睚シテ放言ヲ咎メス大原左

近石衛門近藤傳次郎岡崎ノ城門ヲ出ル時門ヲ守シル者ト
口論シ其首ヲ切直ニ織田信秀カ軍ニ入テ信秀ニ從ヒ服ス
天文十四年乙巳　廣忠君安城ノ敗ヲ憂テ千余兵ヲ率テ矢
矯川ヲ渡リ國中ノ敵ヲ退ントシ給フ尾張ノ軍士寄手ノ寡
ヲ侮テ行列ヲ備ヘス清縄手ヨリ進ミ出テ是ヲ防ク　廣忠
君士卒ヲ勵シテ急ニ是ヲ攻ム尾張ノ軍士利ヲ失テ走リ遁
廣忠君是ヲ逐テ直ニ安城ノ縄手ニ入シトス両兵出テ戦フ
三河ノ兵士戦ヒ疲レテ退シトス本多吉左衛門忠豊馬ヲ返
シテ攻戦フ安倍四郎五郎忠政

家忠日記

本多吉左衛門尉忠豊先鋒ニ進シテ討死ス阿部四郎五郎忠
政尾州ノ士ヲ射ル大久保五郎右衛門尉其首ヲ得タリ

武德大成

大久保新八郎忠俊松平彌九郎忠次モ奮ヒ戦テ功有尾張ノ
兵引退ク　廣忠君岡崎ニ歸リ給ヒテ忠次カ功ヲ感シテ三
州板羽根ノ郷ヲ賜フ
松平内膳正清定ハ信定カ子也信定卒去且又去年ノ秋　長
親君逝去セラルニ依テ其家衰微ス清定心ニ　廣忠君ノ舊
怨ヲ報ヒ給ハンヿヲ恐レテ天文十四年上野ノ城ニヨリ防
キ戦フヿヲナス酒井将監上野ノ城ニ入カヲ合ス　廣忠君

是ヲ聞給ヒテ兵ヲ出シテ是ヲ討チ給フ清定兵士ヲシテ一人モ出サシメス其城下ニ來ルヲ待テ討ントス依テ城中靜リテ音ナシ岡崎ノ兵士ミナ思ラク彼等恐レ服シテ出スト即急ニ追テ城ヲ圍ム城兵二ツノ門ヲ開テ一同ニ進ミ出岡崎ノ兵一戰ニ不及シテ或ハ殺サレ或ハ川ニ溺レテ死スル者數ヲシラス明年丙午九月　廣忠君又上野ノ城ヲ攻給フ諸士ニ告テ言ラク去年ノ戰彼等ヲ侮リテ利ヲ失フ遺恨少カラス定テ知ル今彼等我ヲ侮ル此時ヲ幸トシテ戰ハヽ必ス利ヲ得ン我先陣城ニ近付テ鬨ノ聲ヲ揚ヘシ清定必ス進ミ討ン我先陣ヲ以テ餌トシテ後陣ノ軍ヲ卒テ是ヲ討ン依之先陣競ヒ進ム清定果シテ進ミ出テ戰フ岡崎ノ先陣金田宗八郎正祐中根甚太郎奮ヒ戰テ死ス　廣忠君後軍ヲ卒テ急ニ討清定敗軍ス此戰ニ大久保七郎右衛門忠世十五歳鎗ヲ揮テ戰功有其後將監罪ヲ謝シテ降參ス清定又降伏ス廣忠君清定ヲシテ櫻井ニ蟄居セシメ將監ヲメ上野ノ城ヲ守ラシム

天文十五年丙午松平源三郎信重　廣忠君ノ　夫人岡崎ヨリ歸リ給フト聞テ水野下野守信元ニ叛テ岡崎ヱ心ヲ通ス

廣忠君其志ヲ感シ書ヲ授ケ食禄ヲ加ヘ賜フ

家忠日記

今度世上中事分別無之[illegible]

[illegible]

天文十六年

三月十日　　長澤孫三郎

武德大成

此頃　廣忠君ノ近臣岩松八彌ト云者アリ瞎目ナルニ依テ

時ノ人或ハ片目八彌ト云隣國ノ爲ニ謀レテ弑逆ノ志ヲ懷

ク　廣忠君寢所ニ居給フ時八彌密ニ入テ刀ヲ拔テ是ヲ刺

シ門外ヘ逃出ル　廣忠君刀ヲ揮テ是ヲ追フ城中皆八彌逆

心スト呼フ時ニ植村新六郎家政城ニ登リ橋ノ上ニテ八彌

ニ行逢フ則是ヲ捕テ相共ニ湟ノ中ニ落ル松平藏人信孝鎗

ヲ提テ來リ新六郎ニ謂テ曰八彌ヲ放スヘシ我是ヲ刺殺サ

ン新六郎曰大逆罪ノ者也若是ヲ放テ遁シ逃ハ後悔益ナシ

願クハ我身ト共ニ是ヲ合セ突ヘシ我死スヒ何ノ遺恨カ有

ンヤ松平藏人是ヲ窺フ新六郎遂ニ八彌カ首ヲ斬ル時ノ人

義士也ト感ス　廣忠君感書ヲ賜テ其忠功ヲ賞ス

天文十六年皇朝ハ後柏原院武家ハ光源院義輝　丁未正月　廣忠君御不例ニ依テ松

平藏人信孝ヲ名代トメ駿州ヘ遣シ初春ノ賀儀ヲ今川義元

ニ告シム岡崎ノ老臣等常ニ松平藏人我儘成ヲ憤リテ駿州
ヱ至着ノ日ヲ考ヘ　廣忠君ニ告テ信孝居住セル館ヘ使ヲ
遣シ妻子並殘シ置ル家臣ヲ追放シ信孝カ所領ヲ没収セラ
ル信孝始メ大久保新八郎忠俊等ト　廣忠君ノ岡崎ニ入給
フヿヲ計リ功有ニ依テ政事ニ預リ威望日々ニ盛ン也信孝
ノ叔父ヲ岩津太郎親長ト云先年親長卒去家督ナシ信孝其
身ノ功勞有ヲ以テ親長ノ所領ヲモ自ラ領セリ　廣忠君是
ヲ咎メ給ハス諸人モロヲ噤ム其後弟十郎三郎康高卒去是
モ家督ナシ信孝又康高カ采地三木ノ郷ヲ自ラ領ス岡崎ノ
老臣皆思ヘラク信孝我侭ニ叔父親長弟康高カ采地ヲ領セ
リ其冨ルヿ　廣忠君ヨリモ過タリ若一家ノ親ヲ忘レテ自
立セル志ヲ挾ハ防難カルヘシ松平内膳正信定所領廣大ナ
ル故嫡家ヲ押退ケ國ヲ奪ハントスルノ志アリ信孝今恣ニ
人ノ采地ヲ領シテ飽足ルノ心ナシ豈前車ノ覆ルヲ思サラ
シヤ即チ　廣忠君ニ告テ彼家ヲ滅サントス　廣忠君彼カ
功勞有ヲ忘レサレ老臣ノ諫メ拒キ難キニ依テ其言ニ従
ヒ給フ信孝此事ヲ駿州ニテ傳ヱ聞テ大ニ怒テ三河ニ歸ル
然レ𪜈其本宅ニ入事成難シ怒リ自テ曰我　廣忠君ノ爲ニ

忠有労有レハ　廣忠君何ソ我ヲ捨給ハン此事ハ安部大藏
カ所為ナラン大藏カ子彌七郎弑逆ノ罪アレ𪜈其身免シ剌
ヘ政務ヲモ預リ聞ク我常ニ大藏ヲ　廣忠君ニ告シテ誅戮
ヲ加ントス事既ニ延引シテ我身却テ彼カ讒言ニ遇フ遺
恨甚シ又駿州ニ行テ今川義元ニ憑テ赦免ヲ乞フ義元岡崎
ノ老臣ヲ招ヒテ和解ヲ議スレ𪜈不叶信孝止ムヿヲ不得シ
テ志ヲ上和田ノ城主松平三左衛門ニ通シテ織田彈正忠ニ
従フ時ニ酒井将監上野ノ城ニアリ信孝ト合心ス信孝ノ部
屬𪜈皆思ヘラク　廣忠君ノ命ニ依テ信孝ニ仕フト云ヘ𪜈
彼既ニ叛逆ノ罪有時ハ何ソ其下知ヲ受ンヤト即チ親類ヲ
率ヒテ岡崎ニ來ル　廣忠君是ヲ疑フテ入レス大久保新八
郎計畧ニ依テ針崎ノ勝萬寺ニ入置信孝彌勢氣失フ
家忠日記
同月十六日酒井與四郎家次卒ス
武德大成
同年九月　廣忠君松平外記忠次松平喜藏鳥居源七郎ヲシ
テ信孝ヲ擊シム然シ𪜈利アラス
家忠日記
同月廿八日　廣忠君軍ヲ渡河内ニ發シテ藏人信孝カ兵ト
戰シメ給フ　廣忠君ノ兵松平外記忠次（時ニ二十七歳）松平喜藏（彌右衛門カ兄）鳥居源七郎（彦右衛門カ兄）等奮ヒ戰テ死ス渡河内守將鳥居又

次郎忠次ヲ撃テ其首ヲ得タリ（忠次カ帯スル所ノ青江ノ刀ハ御油ノ家重代ノ名釵也鳥居ハ外記カ従弟タルニ依テ忠次カ釵ヲ松平彌九郎景忠ニ送リ遣ス景忠ハ忠次カ嫡子ナリ）鳥居源七郎ヲハ松平清兵衛尉撃捕之（松平清兵衛ハ松平外記忠次カ譜代ノ士也頃年恨ヲ含ムヿアリ御油ヲ出奔シテ近来藏人信孝ニ屬シ此合戰ニ鳥居ヲ討テ高名ヲ遂ル其翌年松平遂ニ御油ニ歸テ再彌九郎景忠ニ屬ス）

武德大成

天文十六年丁未織田彈正忠松平三左衛門ト岡崎ヲ攻レ

ヲ議ス　廣忠君此事ヲ聞給ヒテ筧平三郎重忠ヲ召テ刀ヲ

授テ曰松平三左衛門一家ノ好ミヲ忘レテ上和田ノ城ニ入

織田氏ノ内應ヲナス我甚是ヲ惡ム汝刺客ト成テ我爲ニ上

和田ニ入テ三左衛門ヲ刺殺スヘシ然ラハ褒美トシテ百貫

ノ地ヲ授ン慎ンテ畏リヲ告ス　廣忠君曰彼ヲ刺ハ事足ン

又汝速ニ刀ヲ捨テ歸リ去ヘシ若刀ヲ携テ歸ントセハ汝モ

又免レシ重忠其宅ニ歸リ弟助太夫ニ語ル助太夫同ク往ン

ト請フ平三郎不聞十月十九日深更ニ及テ兄弟ニ告テ出ツ

助太夫跡ヲ追テ密ニ上和田ニ到リテ溝ノ中ニ隠ル平三郎

城中ニ入三左衛門熟睡ス平三郎是ヲ刺事數ケ所即チ城ヲ

越テ出ツ倉卒ニ腰ヲ損ス時ニ助太夫溝ノ中ヨリ出テ平三

郎ヲ扶ケテ行事二三町有テ其事ノ始末ヲ問フ平三郎曰我

志遂ヌ思慮ヲ勞スルヿナカレ助太夫カ曰兄此功ニ依テ定

テ恩禄ヲ得ン我ニ分チ授ケハ必抱シメ飯ルヘシ若然ラス

ンハ爰ニ捨置ン平三郎カ曰我常ニ汝カ微賤ナルヲ嘆ク我
恩賞ヲ得ハ豈汝カ請フ處ヲ違ンヤ助太夫悦ンテ平三郎ヲ
扶テ岡崎ニ歸ル明日　廣忠君平三郎ヲ召テ其本意ヲ遂タ
ルヿヲ喜ヒ感書ヲ授ケ百貫ノ地ヲ給フ

家忠日記

今度三左衛門生害ニ成忠義之比類無無忠節者也
強く忘失ス可ラス若此生亡ス雖為何者
於末代不可忘者也　此所ニ別日記ニ在之也

天文十六年
十月廿日　廣忠

武德大成

寛平之市成

平三郎兼約ノ如ク采地ヲ分チ助太夫ニ授ク
或説ニ曰平三郎上和田ニ至リテ佯リテ　廣忠君ニ恨アリト告ク三左衛門喜テ是ヲ延ケ置平三郎隙ヲ窺テ三左衛門ヲ刺殺ス其刀ヲ惜ンテ是ヲ拔テ携ヘ歸ラントス三左衛門息イマタ絶ヘス聲ヲ揚テ呼フ其家僕等驚ヒテ平三郎ヲ追フ然レトモ不及シテ止ム此後織田信秀上和田ニ至リ勝レタル者ヲ撰ンテ上和田ヲ守ラシメ且六壘ヲ築テ岡崎ニ逼リ三郎五郎信廣（信長庶兄）ニ城ヲ守ラシメテ尾張

二歸ル

家忠日記

此年織田三郎信長（干時十四歳後上總介ト号織田彈正信秀ノ男）始テ兵ヲ卒テ三州吉良大濱ニ發向シ邑里ニ放火シテ尾州ニ歸ル松平三左衛門尉不慮ニ遭害ノ後織田信秀暫時謀ヲ失フトイヘトモ又上和田ノ砦モ尾州ノ援兵ヲ籠置キ其近邊砦ヲ築ク事六ケ所ニシテ是ヲ守ラシム三州ノ諸士信秀ニ志ヲ通ルノ間國中岡崎一城ニ迫テ四面ニ敵ヲ受ル依之　廣忠君駿州ニ馳テ今川義元ニ援兵ヲ乞給フ

武德大成

義元駿河遠江ノ兵ヲ發シテ三河ノ加勢ヲ成サントシ人質ヲ廣忠君ニ乞フ　廣忠君止事得給ハスシテ　竹千代君ヲ駿州ニ赴シメ人質トシ給御齡六歳也岡崎ヨリ駿河ニ至ル迫其道路敵多シ田原ノ城主戸田彈正少弼娘ハ　廣忠君再嫁ノ　夫人也其内縁有ニ依テ西郡ヨリ艤シテ田原ニ至リ給フ然ルニ彈正心ヲ尾張ヘ通シテ息男戸田五郎兵衛ヲシテ青銅千貫ヲ以テ　竹千代君ヲ織田彈正ニ鬻ク是ニ依テ　竹千代君尾州熱田ノ浦ニ至リ加藤圖書カ宅ニ入玉フ金田與三左衛門供奉ス大ニ驚キ三河ヘ歸リ給フノ計ヲ運ス其事アラハラルヽニ依テ織田彈正金田ヲ

殺シテ其首ヲ三田橋ニ梟ス

或説ニ曰此時金田與三左衛門平岩七之助同助右衛門阿部善九郎同新次郎榊原平七郎天野又五郎村越平三郎江原孫三郎等　竹千代君ヲ送リ奉ル戸田彈正假館ヲ鹽見坂ニ建テ饗應丁寧也森平太ト云ヘル者アリ戸田彈正カ叛心アルヿヲ知テ供奉ノ人ニ告ル何モ信トセス明日戸田舟ヲ熱田ニ向ハシム依之供奉ノ人俄ニ驚キ氣ヲ失フ然レ𪜈無為方此時天野又五郎歳十一歳其家僕ヲ呼テ曰早ク岡崎ニ歸テ始末ヲ告ヨト　廣忠君聞給ヒテ其

夫人市場殿ト号ス ニ告ク夫人啼泣シテ其父ノ不義ナルヿヲ嘆キ給フ

落穗集

[illegible]

竹千代殿を

[illegible]

竹千代殿を

[illegible]

竹千代殿を

[illegible]

年数寄中有之者之義（後生勢一戦を遂ての事ゆえ
なり　廣忠公小田原へ使者を御差出しまゝ伝達
清延義元成敗を今川家へ申し出る前入魂の後を慎く由緒
ありし後為まゝ今更なんぞ人を後ハ思もよらざる後也
然る　竹千代殿を清延に預ケ置り尾州へ
信秀様へ御出せ遣ハ一子様を小田原へ引渡義理
を遂ハ、この事振ハ今ハ亡者もの様なれ使者を作り
小おゝ〳〵ハ様使者安倍小太郎ハ遣ハ中間衆と御
口上なりを様使者尾州へ（ゆり　廣忠公の清延義元
不義達ハ為信秀様へ御成成人ハ小〳〵早速熱田へ
義御ゝ一紙　竹千代殿ハ伝来大切ハ事
この事を加茂図書を始め熱田人衆も等後阿古屋
様久松彦次郎（清兼様方へ御預ケ
清入ハ　竹千代殿ハ清方（向後清盲目を以地業
者も清国この有ハ但清数国ハ成成人ハ
この後有　清母公院様不斜夫より平田久蔵竹内久左
ゝ事あ人様待を交ゝ（熱田へ参紙　竹千代殿の
清安者清弥左衛門又ハ伝草ゝ様ハ様物を伝送り

しなり

家忠日記

其後　竹千代君駿府ニ富居アルノ時モ　母公ヨリ此
両使ヲシテ音問ノ御使トシ給フ

落穂集

天文十七年ヨリ織田信秀ハ岩倉城ヲ可攻
取ト云フ軍勢ヲ催シ尾州ヲ出張シ駿府ヲ
和睦ス元年ハ戊辰　廣忠ヲ加勢トシテ雪斎和
尚ヲ引ク　其弱小ナル為ニ岩倉城ヲ取除
キ人数ヲ参列ヘシ元年ヨリ小豆川小
豆ヲ以テ織田信秀ヲ安祥城ヲ出矢矯川の陣

陣ヲ渡リ上和田陣若小陣ヲ取ル時　廣忠君ヲ岩
倉ヲ出ル勢ヲ一ツ小佐成ヲ攻ル
処小豆川ヲ前ニ清一戦ヲ上和田表ヘ出ヲ
出表織田二郎ヲ信廣ヲ蔭川表ヘ押ヲ一戦ヲ
可遂ト云ヲ引ル小豆坂ヲ
行ヲ二手ニ小関ヲ一ツ　軍仕ヲ今川勢ヲ
別ニ小豆ヲ一番ヲ今川勢ヲ
の内ヲ酒井雅楽正新進ヲ織田家ヲ海
大学ヲ討取ル尾州勢ヲ引退ク処ヲ今川

德川方家臣者ども指小豆坂迄追掛織田二郎三郎取
て返し追来る歌小河原を見て織田道酒元小方左迄
長田助左衛門作と云年人同弟次中野又兵衛
廣忠と云と組小踊と云まりて力戦を尽を世小豆坂
此七本槍と云ふ小原肥前守と云小諸尾別熱田一小
取て返し雪と戦小後今川勢利を失ひ敗軍よ
り小河小　廣忠公此人数も今川勢を捨て寄く
る小林源助林藏之助等ども三十人討死
を遂る今川勢既小大敗軍と見ゆる処小長沼新郎等

武器ども捨て逃去り一揆徐小寄手尾別勢を追
篠一今川方小金田彦助尾別孫勇之徐ハ二位
を組討小致せしを牧野の後之かゝて信秀ハ安祥の
城小信廣を移し一色尾別へ海津ちう
續閑談
今村家傳小曰ク組今村彦左衛勝長　信康君　廣
忠君小奉仕して天文十七申年二月十九日二別小豆坂
合戦此討小ニ名仕沙藏を家り沙藏を家を沙領す
家忠日記
四月十五日先日小豆坂ノ合戦ニ尾州ノ兵利ヲ失テ退ノ後
藏人信孝一手ノ軍勢ヲ以テ攻テ岡崎ノ城ヲ拔ントスルテ

兵ヲ卒シテ明大寺ニ出張ス岡崎ニ其聞エアルニ依テ　廣
忠君ノ命ヲ奉テ酒井雅樂頭正親石川伯耆守數正ヲ部將ト
シテ明大寺表ニ發向ス于時大久保五郎右衛門尉石川新九
郎等相謀テ究竟ノ射手七十余人ヲ撰シテ歩卒トシテ小塚
ノ陰ニ伏置約ヲ定テ信孝カ進ミ來ルヲ待信孝多勢ヲ卒メ
明大寺ヲ發シ曹山ニ至ラント欲ス于時七十余人ノ伏兵一
同ニ起テ信孝カ陣ヲ少々射捨菅生河原エ駈ヌケ又明大寺
ノ町ニ引返ント欲ス信孝士卒ヲ進メテ是ヲ追ハシム射手
ノ伏兵等輕ク引テ明大寺ノ町ニ駈入兵ヲ伏テ是ヲ待信孝

町口ニ至テ士卒ヲ指揮シテ扣ル于時伏兵七十余人両方ヨ
リ不意ニ起テ矢ヲ發ルヿ雨ノ降カ如シ其矢信孝尤ノ腋ニ
中テ馬ヨリ落テ忽ニ死ス大將矢ニ中テ命ヲ殞スノ間士卒
氣ヲ失テ位ヲ乱ス岡崎ノ兵三百余騎関ヲ發シテ一同ニ競
ヒ懸ル信孝カ軍士悉ク離散ス北ルヲ追フヿ不遠信孝カ首
ヲ得テ岡崎ノ城ニ歸テ　廣忠君ノ實撿ニ入ル酒井雅樂頭
石川伯耆守大久保五郎右衛門尉石川新九郎等ヲ　廣忠君
ノ御前ニ召テ其戦功ヲ褒セラル
武德大成
廣忠君曰藏人ハ吾叔父也我彼ニ恨ナシ一旦戦ニ及フトイ

ヱ氏豈彼ヲ殺スヿヲ喜ンヤ汝等生ナカラ捕來ラハ我死ヲ
赦シテ彼カ心ヲ和ケ再ヒ骨肉ノ好ミヲナシテ憤怒ノ情ヲ
止シト惜ミ悼ミ給フノ心内ニ動キ悲ミ憂ルノ涙外ニ顯ル
諸卒皆其志ヲ感ス

家忠日記

此年　廣忠君軍ヲ三州重原ニ發シテ尾州ノ兵ト戰ハシメ
給フ　廣忠君ノ士阿部四郎五郎忠政尾州ノ部將荒川新八
郎カ從卒ヲ多討殺ス
此年織田信秀カ兵三州西ノ野ニ出張ス　廣忠君軍ヲ卒メ
是ト戰シメ玉フ　廣忠君ノ軍士杦浦八郎五郎渡邊九右衛
門阿部四郎五郎等能戰テ戰功ヲ盡ス尾州ノ兵軍ニ利ヲ失
テ退ク

武德大成

同年　廣忠君兵ヲ發シテ八草ノ城主中條氏ヲ攻給フ干時
中條氏モ又岡崎ヲ窺ントシテ軍ヲ出ス両陣重原ニテ相逢
テ合戰ス中條氏敗シ去ル此頃ハ　廣忠君梅坪ノ城主三宅
右近ト接戰右近敗軍シテ逃去ル
同年織田彈正忠七千余ノ兵ヲ卒シテ又西野ニ出陣ス岡崎
ノ兵士備ヲ固メ是ヲ待彈正忠岡崎ノ兵寡キヿヲ侮リテ柳
川地ニ出張ス　廣忠君能射ル者ヲ撰シテ矢ヲ放ツヿ雨ノ

如シ長坂茶利信政急ニ馳鎗ヲ取テ楯ヲ突ク従者ノ曰鎗ヲ
倒シテ楯ヲ突ヘシ茶利是ニ従フ楯忽破レ倒ル岡崎ノ兵士
勢ヒニ乗シテ等ク進ム尾張ノ兵悉敗北ス弾正忠一騎ニシ
テ清須ニ歸ル茶利始ノ名ハ彦太郎合戦毎ニ鎗ニ血ヌラス
ト云フナシ　廣忠君其鎗ヲ見ル毎ニ常ニ血鎗トノ玉フ血
鎗ト茶利ト和訓相通ス故ニ其子孫茶利ヲ以テ稱號トス

老人雜話

天文十七年秋信長英濃ヲ攻ル時廣袖
の陽炎小陰形を大小深付く若し茶釜髮ヲ付山城
守の家老なると國境まで迎ひ出て其を見聽を落し
密ひ云は無疑抜人ハ七又二ヲ武法なると不敢合なりんと
て早使を起し いひ合ひ東奥ヲ大なるなとを用ゐせよ
とりの信長宿ハ長ハ嘗ハ情来あり しく調へて山城を
ハ射面を又勢を強きを元ヲ七又二ヲ武法を用ひ無きを
山城守嘆して曰古國を婿引出物ハ たりとそ
んを我子供なと國をたりの事ハ ハし信長ハ
せんとなりのなり
洪茂山城守は山濃ヲ油賣乃子なり父と妻とを牽
して英濃ハ行て山城守を生て居ハ云 英濃の

小取入て仕（しり）た故来り国も乱まてりふいりてこまん
終小美濃地国をも小城を付給ふ書小
とはなれとのりたりもせぬ江布侍ニ布ハ破まて一布小ぬ
文十八年二月十日今川義元を安祥城をこの攻とく
信長和尚小朝比奈小飯中守を義元ニ別（出撰）を義元
岩瀬城（おぢ）　廣忠公（岩内侍中知に元初小岩城を
攻れを後安祥城小れをりこの城を　廣忠公
思召小付先岩瀬を取巻知小城を松平義人
信孝小まを去年管生河原の一戦小打死を岩城中小ハ家
来ども井籠ヲ居ひ付ヲ防城小不及早速城を明渡
しひ付　廣忠公佐人牧城内をおく番ヲ小給義元今
川勢と一回小安祥城をこの攻落この後尾別（おりま）
ヲ小付安祥城を援ぶとして信秀より平ヲ来に
又ヲ余城勢をお添信廣（の加勢なり平ヲ像と臨戦
と急ぎ安祥城下ヲくまて押来て陣を取打しも
を取ぶ為小岩瀬勢平ヲ陣所（押よ也火を小攻
ヲ也ハ尾別勢防戦ヲ事小付して敵軍小及ふの強
勢付節安祥城（も押寄ニ城曲輪まて攻破る尾

別紙を以御伺ニ成長崎方ニ文永八年ハ神示被ニ成遣
対馬ヲ通ル船きゝ城ニ成ハ戦ひ負け所ニ郡ニハ
捨ル尾ハ元寇ニ形ハ城将信長切腹せしむ又ハ路
人と物ハ因人ハ二ツ一つ宜し如ハ尾別ハ拙者
小平ハ拙者城所ハ小ハ形浦と入信長と助命ニ成尾
別ハ神ハ移ハ小ハ徳田ハ留亜ニ成せし
行ハ代君と長崎ハ城ハ入ニ成ハ
石ハ城ハ行ハ一度ハ府ハ中越前元拙者長崎ハ
う行ハ代ハ如ハ宮ハ和尚と成ハ先ハ行将

ハ代ハ　行ハ代君ハ神事と成元ハ日ハ長崎
ニ成ハ成ハ府ハ中ハ早速出船ハ有
ハの成ハ事ハ無田ハ
長崎ハ神ハ城ハ拙者ハ洋拙園と解ハ法長と尾別ハ
出神ハ行ハ大久保一堂拙元と行ハ
行ハ代君ハ事ハ天文十六年ハ国十八年ハ
尾別ハ国ハ寓居拙ハ今長崎ハ神城
拙者ハ　長忠ハ大ハ
大ハ国ハ国ハ長出事ハ中ハ

出羽地方ハ　廣忠公ハ元年今川義元ハ出羽守様ニ
ゐて其上今度駿河より　行末代君様ニ成功ハ
様ニとて今川家乃面々武功ハ　行末代君様ニ成ハ
ゐて　行末代君をたゝ出て沖の前ハ
義元ハ　行末代君様ニ成ハ
ゐて沖ハ酒井雅楽頭大夫三郎左衛門尉
若十郎左衛門尉同彦九郎同彦七郎
義元ハ沖ハ駿府中ハ沖ハ見送りとゝ
年ゐ沖ハ藤左衛門尉
廣忠公ハ沖ハ御屋形内を

出見送りハ　行末代君様ハ阿部善九郎ハいまゝ細ハ
沖ハ道中出仕様ハ免ハ
樂ハ出仕ハ　行末代君様ハ
廣忠君沖ハ出ハ
駿府ハ世ハ義元解ハ
ハ　行末代君様ハ
中今川家僧代様ハ出仕人ハ中ハ
自由ハ出ハ

家忠日記

同年三月三日織田備後守信秀初ノ名弾正忠卒其子信長十時十六歳家
督ヲ継テ自稱シテ織田上總介ト號ス

信長公出親父備後守殿信長公小軍扶法迷言小猪を脇
[illegible]
ふる事なり 此事信長公出家なり[illegible]

祐天物語
天文十八年六月六日　廣忠君逝去大樹寺ニ葬奉ル
家忠日記
春秋廿四歳
御法名瑞泉院應政道幹
祐天物語
扨　竹千君ハ御幼少ニテヲハシマシ候故二十ニモ御
成長被成候ハヽ城主ニ被成候半ト義元被申テ則駿河府中
シヤウ〻ノ町ニ水野右衛門大夫御後室法名華用院源翁尼
ト申御人ニ預ケ奉リ十五歳迄彼所ニ被成御座候　右華用院
ハ前知源院ト申テ駿府ニ有此所ニテ　竹千代君御手
習ナトモ被遊シ也干今御手習ノ調度モ相傳リテ有
武德大成
竹千代君此時駿府ニ被為入候御供ニハ酒井與四郎重忠天
野三郎兵衛康景平岩七之助親吉阿部善九郎正次同新四郎
高力與左衛門清長内藤與兵衛村越平三郎古橋宗内榊原平
七郎渥美太郎兵衛友勝平岩新八郎同善七郎本橋金五郎渡
邊勘解由左衛門同甚平次天野又五郎石川彦次郎同内記植
村新六郎宗政及奴僕百余人従ヒ奉ル
祐天物語
世上ニ云傳フ山中ノ寶藏寺ニ有之御調度共ハ駿府亂妨

ノ時紛レ来リシ物也寶藏寺ニテ御手習被遊シト云フ

ハ虚説也

落穂集

初て義元ハ長谷寺に参詣仕る老中と後府様拵さ節渡ハ

竹之代君伊豫長谷ハ仕自身事と仕取寺ハ分ハ長谷

頂と成一ハ義元より取寺ニ名家老と面ハ

一家と成中と名妻子と云具ハ立後府様ハ長谷

拵ハ九二の九ハ今川家拵ハ大物と組ともに交ハ

在番節ハ名居伊賀ハ等御村ハ用事ハ多役人

中と成ハ三の九ハ住居ハ

廣忠ハ立世ハ家ハ

亦ハ仕亦拵ハ拵事と申ハ成ハ拵ハ拵ハ

成と毎ハ伊賀ハ名後府様ハ拵ハ

後府様ハ拵事ハ用ハ長谷ハ長谷ハ

ハ長谷ハ居ハ伊賀ハ来ハ拵役

人中ハ居ハ名ハ拵ハ大分ハ後

府様ハ立ハ今川家拵ハ一回ハ軍役等

ハ拵ハ拵ハ一家長谷ハ拵ハ拵ハ

逆成ハ廣忠ハ拵世ハ

長谷ハ拵ハ

竹之代君拵

或説義元ヨリ石川右近安部大藏両人ヲ以テ岡崎ノ城代トシ鳥居伊賀守忠吉松平次郎右衛門重吉ヲ揔奉行トス ト云々又曰義元旅館ヲ駿府宮ケ崎ニ築キ 竹千代君ヲ置奉リ又久嶋土佐守ヲシテ守護セシメラル然レ𪜈資用菲薄ニシテ上下困窮ニシテ衣服ノ召替モナク庖厨常ニ寂寞タリ鳥居伊賀守ハ先君ノ遺老ニメ其家富饒ナリケレハ常ニ衣服庖厨ノ料ヲ潛ニ贈リ奉ル或ハ山中二千石ノ地ヲ請テ日用ノ資トシ奉ラント申ケレ共義元許サス君臣共ニ雖ヲ阜ルノ地ナシ義元約諾セラレケルハ竹千代君成人ニ及ハ西三河舊境ヲ還シ参ラセントナリ譜代ノ士此物言ヲ特シテ身ノ飢寒ヲ忘シ或ハ駿府ニ有テ權門勢家ニ跼蹐シテ辱メヲ忍ヒ或ハ三州ノ舊里ニ居テ自ラ耒耜ヲ取テ民業ヲ營ム千辛萬苦十餘年ヲ經テ其志確乎トシテ拔サルハ古人ノ膽ヲ嘗雪ヲ食スル節義ニモ劣ラサリケル忠誠也

一説ニ曰義元毎年尾州ニ兵ヲ出シ又尾州ヨリ三州ヲ侵ス時ハ西三河ノ諸士ヲ鄉導トシテ軍セラル譜代ノ士毎度苦戦シテ父子兄弟ノ死傷ヲモ悔ス唯義元ノ下知ニ背

カスシテ約言違ヒナク吾　君ノ早ク岡崎ニ歸ラセ
給ハレヿヲ耳願ヒケル
又曰　廣忠君逝去ノ後　竹千代君駿府ニ寓居シ給
フノ間三州ノ諸士大概今川義元ニ從ヒ駿州ノ令ヲ受ク
旦又御門族並譜代ノ老臣等松平和泉守松平監物酒井將
監同九衛門尉ヲ始トシテ各今川ノ指揮ニ依テ駿府ニ住
ス　竹千代君御成長ノ間ハ三州一圓ニ義元預リ置
ノ由ニテ駿州ヨリ代官ヲ差遣シテ支配ス然ルニ譜代ノ
諸士今川ヨリ推テ領地ヲ追放レンカト各是ヲ疑フノ由

竹千代君聞シ召シテ御書ヲ賜フ其辭ニ曰
廣忠君出置給恩之事右任彼定貞數無相違令所務彌如
廣忠時可抽奉公者也
天文十九年十月十二日
御書ノ趣キ如斯シテ三州ノ諸士ニ賜ル依之三州在國ノ
諸士疑心ヲ散シテ安堵セリ
世ニ言ヒ傳フ駿府ノ俗十月十日安部川原ニ出テ石戦ヲナ
ス石戦ハ俗ニイシデトヽ云蓋シ武ヲ備ヘ勇ヲ好ムノ一端ナリ　竹
千代君時ニ僅ニ十歳奴僕ノ肩ニ駕シテ是ヲ觀サセ給フ一

方ハ三百余人一方ハ是ニ半セリ見ル者多衆ノ方勝ヘシト
テ彼方ヱ赴キケル　竹千代君奴僕ニ命シテ寡少ノ方
ヘ行シム怪シテ問奉レハ　君宣フハ多衆ハ勢ヲ恃ン
テ其心一ナラス進退散亂ス寡少ハ寡ヲ知テ力専ラニシテ
勇ヲ勵ス多衆ハ以テ可散トテ寡少ノ方ニテ見サセ給フ果
シテ多衆ノ方敗シニケル時ノ人是ヲ感シテ曰鹿生テ未班
ナラサレトモ牛ヲ食フノ氣有トハ此　君ノ事ナルヘ
シト云義元モ是ヲ聞テ将門ニ將有ト云フハ信ナリトテ此
ヨリ　君ノ良将ノ器ナルヿヲ知テ彌貴重セリ

家忠日記
同月廿日酒井與四郎清秀卒ス
武德大成
弘治元年乙卯皇朝ハ後奈良院武家ハ光源院義輝　竹千代君駿州ニ在ス
今川義元駿州三州ノ兵ヲシテ尾州ヲ侵シテ蟹江ノ城ヲ攻
シム岡崎ノ兵松平和泉守家乘先鋒タリ松平久助同新助忠
澄同隼之助鈴木伝右衛門今井喜兵衛梅村喜八郎ホカ戦メ
功アリ川合帯刀鎗ヲ合ス川合才兵衛組討ノ功アリ阿部四
郎五郎忠政大久保新八郎忠俊同甚四郎同七郎右衛門忠世
杦浦八郎太夫父子三人先鋒ニ進ミ奮ヒ戦テ鎗ヲ合ス尾三
ノ間是ヲ蟹江ノ七本鎗ト稱ス武井角左衛門大橋新三郎等

戰死ス

續閑談

牧戦小浜木工助重次槽を焼殺し功を励まし牧重次の父内
藤助重信と称し三百石一本拵郷二百石千貫を給し
檜垣嘉兵衛と共に同国に助小弥と甲別称し戦ふ
命を殞さしめ妻二別保城を松平大学助忠俊の
子大学太郎の後家なり太郎小浜藩に仕へ内藤助重信
小姓にて子供出生後出家し後見も有り色戦死し　伝通院様
伊大方様　伊側小浜家を出仕し子孫助重次小父の
遺跡を嗣ぎ三百石七拾騎組頭にて長崎御代官

元和二年十月卒去　ニ子孫助重利東金小稲
紀州藩小屬世襲　又紀州藩大坂陣に出陣し組中に生
陣死有り也上野介殿時小東金小稲元頼知行没収
重利も浪人なり元禄の大坂陣前嫡子恩恒後重
助称ス　大坂番小石出次男九郎右衛門と共
檜垣様小
今伊勢野小浜藩に召抱出小重利重頼藩河忠長御
附人小石出
武陵叢話
同年九月中国探索大内義隆生害之節老臣陶尾
張守隆賢入道全美と不和に成陶逆心小浜に義隆生

宮内陶大利を以て大友宗麟弟三郎義長を周防へ
越大内氏に対し奉り大内義長と云ふ元就と云ふ者
せんさく陶に随ひ人数年弓矢を以陶方より周防
岩国に永興丹後守と云ふ者丹後智勇共に士卒に岩国に
名城なり元就を大事に思ひ其の頃陶全美
より度々使者を以人質に成べしと申を遣ス一族別
右田元就元能兄弟中共事を守原て見て取詰ス
元就を如何ん様に成ん家を滅し彼度々を迫日夜を分り遣ス所

故に陶方に対は元を受ける所に成り元就
を能と成ん家を集め岩国城を永興丹後
殿方へ内通する日出度事と思ひ彼度々を
陶方へ無限を云ふ者に成る故全美に警を新に附ス丹
後を休息に成ル山口へ帰り居る如元就自筆にて内
通後を待るこの状を深め山口を明日共書人集
ひ新に全美へ出し居る故元就自筆にて永興丹後
方へ状を書て全美恐て永興丹後を誅戮せ
元就に後に全美と元就打安堵と云ふ知て一戦

〻陶方敗軍〻大将玄川甲斐守討死て全く義大に
憤りて重〻大軍を催し押寄れとも元能ゟ当方
小陶大軍りく港地を拵へ草津井日市へ引
て平地ゟく防くゟ仮りなり〻対小要害ゝて八橋尾
一城なれと中〻利を取れ事八能〻ゟ厳島へ陶後
らハ大軍といふとも宮島へ迯入て岩陣せは寄り来
る船をゟる空船之見を火矢ゟく焼立て宮島を歌百
百ゟりとも船なるをハ逃て〻ゟ対小名猥なられハ
全義矢ゟけゟ思ふとも付ゟ海ゟ行事ゟ〻陶と

宮島へ引さ出さんとゟ前〻て元陶ゟ年来遺恨
ゟりさ変義人彩里ゟ右迯を宮島井小浦の城ゟ
義亜陶を拵ゟ元之毛能ゟ拵ゟく軍評定〻
ゟく日陶大軍ゟく迫日ゟ〻〻草津井日市へ
ゟ来ゟハ兼ゟく海方ゟ立ゟれて陶大軍ゟゟ
切掛ん事必定ゟ拵ゟ義宮島へ寄ゟ押寄て軍せハ
元元能ゟ滅亡ゟ対義ゟ来へゟ行ゟ〻て草津井日市
へ陶ゟよゟ〻岩国ゟゟ江中三河ゟも海方へ内西井
子細ゟ引ゟ宮島井日市へ陶ゟ寄ゟ拵ゟ〻〻〻〻〻〻〻〻

と評定するを聞き、番船に陶方、
各船に乗合を信じ、夫より宮侍、海を渡り
文殿に江津に三河を経て宮侍、出張りして芝浦に屯する
を、第洲井日市、出張す、
不用江津の元能と云へる人を大将に第洲井日市、出張す、
しと諫し、船に且て日比熟知の海を渡り、変形星面人の
宮侍小みなとを渡りとかくとかく宮侍、とまり、江津元
年十月廿八日宮侍、海を渡りて万余人、敵軍結ぶれば
西を要路長浜荒夷を引出し、東を大領寺金堂
宮侍前小大船を乗付けなり、皆一同小船小より登花巳
扇寺金堂天神大黒堂寶殿前塔婆山を城浦津麻
第洲又芦山城直ち小元濱して小浦城を攻れより
武士船二百艘井日市方小濱出し元能後詰を伯中作
元能を今日敵ひ十記一生小寄め石田城を攻
之に第洲小陣元を鎗傷小二人余人石見城を
藤判熊谷孝度を天野降重河内治部度を三沢
掛波を吉川常力を加勢を会せ、巳に余兵
を寄せ二里押に地侍前火を焼浦小を焼き、八十月

廿九日之軍令を出して曰押前を後とする人二組
之行ふして兵法多ふ人を凡する事なりと云ふ世者
ふ人火を兵庫ふ津元ろう宮ふ地所前代神を毎日蛤
来ふ参り宮ふ渡りて奉幣をする船法ろう元能
船神ふふ侍を人船ろう之く海夜を鳥帽子を乗せ
宮ふ渡らせるに海ふ参るも殺人向ひくふ何ふ
神を元能方法ふるなれと問ふふ神を答へ中ふは
第廿日市より海夜宮ふ参るふて勝利ふる如ふ船ふ
渡ふふ所ふ先利象法滅亡ふて元能を火を兵庫ふ参る

ふろふを参る果今日ふる中ふ第廿一元へ宮ふの沙
法ふ参ふ渡ふる人ふ海方法神ふふ元能宮
ふ軍法を示ふ曰一組之者を混田ふ測屋明神法
前より潜ふ船より大宝法前より多宝ふ来
法前を過宮ふ法町ふ向ふ一組測屋ふ神より町ふ
参ふ三里なれふ日参ふ押入屋一組を高郷ふ
法郷人ふ命ふ元能ふ降元を大ふ
法ふ元より要院休堂渡法前屋を防より
西へ岸へ露羅ふ海を法ふ横ふ炬火を法ふ月

郷人ゟ余人ゟも炬火を二百発ゟ放出し
種子島を打場として一度ゟ火を三浜地と打三国
を揚へ一組ハ石川元忠ゟ武士船数百艘を引て
浦上へ出浦ゟ亜陶ノ船を焼三浦上より攻
ゟ来て海上ゟ合を示して海上ゟ対馬軍ゟ舶ゟて
今日第波へ引れ人夫ゟ小荷駄下人共引列を乱さ
ず只今第波さして引ゟ若今明ゟ朝風
吹ハ吹暮ハ元船ハ今宵火三浦ゟ逃出ス
三国三百ゟ持物兵粮を捨へ落還上ゟ行へ

と解ゟ小荷駄ゟ及元船ハ俄ゟ下知して西口今
宮浦へ元ノ渡ゟ へ石畳ゟ船へ乗ハ
皆出ゟ船組を乱し人馬を奪入ゟ へ篝を焼
事なり元船ゟ船地打を用出ゟ下知
ゟ国ゟ別ゟ火三浦を地ゟ荷を奪出ゟ
大風大波天ゟ雷電ゟ鳴ゟ高波ゟ
海上危ゟ ゟ小風なれハ宮浦へ順風亜藤ゟ
ゟ夜ゟ夜ゟの別ゟ荷ゟ宮浦ゟ西松浦敷浦ゟ
荷ゟ ゟ落ゟ陸ゟ上ゟ船を一艘も残ゟ火三浦

一度〻士卒小必死を示し〻より板津〻より対馬を経て元船陶
より対馬を経て国元府城を攻め〻已の新〻今日
大利を得〻陶を宮島に流し元船を焼き
より国せ〻海中〻沉めおを〻り降元ハ軍兵二百艘
小人夫ハ〻る対〻海山陸ハ対〻り山伏組〻藤より十
八町より無附伊豫国北船ハ能島来島ハ合力して
元船小勢を宮島に〻る陶ハ番船を切れて国を立
退き元船を先〻して栗屋掃部国司右京亮
十市尼信ハ国源尼寺ハ兼定ハ二郎〻余〻〻玉先小を

元船二〻小〻国衆二陸小押寄進む宮戸降衆福原
越後ハ長慶後援後活〻して〻〻〻〻元船も測定
より打上り牡口より押〻せ小早川降衆ハ能谷豊後守
天地降衆河内沼ハ又百余海上より攻ハ向ひ一度小
国を揚陸山伏山〻来〻伏ハ対〻り炬火又ハ余
伏人夫二〻小宛伏炬火を焚〻〻煙を大筒を放〻〻を
国を揚ハ陶ハ軍勢強〻を〻〻〻ハ会防を鄭小降衆ハ
ハ海ハより押寄を無〻〻り陶ハ船を焼を〻〻皆焼〻
打〻を元船強を小て玉先小切〻を歌味方呼喚

八山源も鄕書を渡り天地も并迫源を渡る元勢の兵士を
坪井福原渡を仮田中村に二戸に二宅児玉を先を
陶の陣を切為して数百人討死吉川元春宍戸隆家
福原貞俊志道に相応入魂多宮内朱拙より
横合小切を以り逆小陶の大軍を切為にかゝるを
陶方より三浦越中守賀村武百余騎入魂て来る小早川
隆景二百余騎ゝ渡り合三浦越中守と隆景と一番
槍を合て越中守を突伏りると内藤元盛合
く越中の首を槍下小討取より給きも越中の軍

兵も面も不振切を以り火花を散して卿ひる加隆景
の兵坪井刑部少輔并次郎内海左馬元山縣勘四郎討死を宗井
左京横槍を入七十余騎ゝ三浦の陣を突為陶
方江津三河守国中勢二百余ゝ吉川元春小切を以り
しを元春下知して引包を大将三河守を拾ゝ一人
も不残討留り陶の旗本六百騎小早川隆景の陣へ
切を以り入時毛利の兵栗屋又四郎一番槍を入合戦別
槍下ゝ討死を元能ゝ旗本ゝ隆景を取囲
切を以り陶の旗本を切為ゝ児玉内蔵元栗屋

与十郎福原右京亮を八幡より出し陶方を九国を大方
討取る陶方より羽仁越前守同将監二子余山城守
出り是を見て見元討死る彼討死る彼も明
れて翌日彼陶全義八幡余山道場山山口を
小弾元忠元能は熱軍を一日小して討く是全義
と戦を先途と防る御引て十二度に
戦小返方も負死人八三百を数を不知全義を陶小討負く
増長へ引退し陶小自害し九て逃出て行方知れず
彼山陶動解由小十郎人自害し戸を原く陶小納め
り元能を已下七百八十余人首を討取生捕を百五十余人
を焼へり岩屋へ沈む者三子余なり元能
八見玄門義元小中村く陶全義の首を尋出して獄門小
を主人大内義隆を弑亡魂を慰し為の天文十一年を文
陶小弾元鴻中抜殘党を尋糾捜し誅伐し元能を文
より小方浦へ弾正し防府山口を攻入し文度せり蓮花
山城を攻落小陶も陶糸を元能八敵を山の城を糸
を以て扶治勢を討果し防府山口を攻平け翌年二月小鈴
岡へ陣を寄して周防長門を日小月日朝日小を搦

山口城を攻落し、内藤隆世を討果し、長門の國府（押領）
し、大内義隆陶安房守同之命一戦ハ討負し、長福寺へ
引籠り、元就取囲み、使を豊後大友宗麟（当時出家
宗麟）に送り、若一命を助ケ給ハヾ、思召ハヾ、支（送り）
申と、ハ第ハ、大宗麟ハ迚ハ義長家来共申和
ハ、同義長ハ元就ハ、次申ハ（紹鷗不相）
瓢箪ハ、茶入大内義隆より義長ハ、渡りたる品と、最
送り、ハ、高麗中越ハ元就ハ、則彼瓢箪ハ、茶入を義
長より、渡して、大友（当時）、同月七日大内義長、陶一門を、討

果し、中ハ、紹鷗瓢箪ハ、茶入ハ、大友より、渡ハ、ハ、公方ハ、山岳
院義政ハ、道具と、紹鷗ハ、渡ハ、紹鷗ハ、不相して、支より
大内義隆ハ、ハ、渡して、義長ハ、より、義長より、元就ハ、
し、大友（当時）、天正十之年、大友義統、秀吉ハ、（秀吉）
相伴、宴、饗、ハ、上杉中納言景勝（秀吉ハ、
ハ、下ル、是、淳正大納忠勝、ハ、十年、相伴ハ、
所相伴、年数、ハ、ハ、上杉瓢箪、号す、上杉忠勝、逝去
し、御ハ、遺物、し、し、
公方（秀吉）、ハ、し、ハ、加賀中納言
利常、ハ、
公方より、ハ、下、重、し、利常ハ、逝去し、御又

公方〈より〉を紀伊大納言頼宣卿源君〈のひろ〉の時
公方沙汰自頼宣卿〈より〉〈ゆ〉今小紀伊小納言〈より〉〈ゆ〉宣小
納言代伝物なり

感狀記

大内左京大夫義隆ハ九州ノ管領ニ補シ七州ノ太守也防長豐筑

備藝石

其家老陶尾張守隆房三萬貫ヲ領メ威ヲ張權ヲ專ニス
又老中ニ相良遠江守武任ト云者アリ文武ノ才藝人ニスク
レ智畧雄道他ニ異也依之義隆ノ優寵尤甚シク遲々タル春
ノ晨ニハ花間ニ宴ニ侍リ清々タル秋ノ夕ハ殿上ニ文ヲ奉
ル國中ノ事大小トナク相良カ門ニ出スト云コトナシ是ニ
ヨツテ士庶人皆手ヲモミ膝ヲ屈メ敬セサルモノナシ陶隆
房寵ヲ子タミ權ヲアラソヒ其心ヲ君ニ失スルヿヲ憤リ不
意ニ陰謀ヲ企テ夜中ニ相良ヲオソヒ急ニ討殺サントス相
良ノカレテ筑前ノ國花尾ノ城ニ楯籠リ陶カ逆心ヲ挾ムヨ
シヲ義隆ヘ告ク義隆モ陶カ恣ニ相良ヲ責君ヲナイカシロ
ニスル事ヲ怒ルトイヘ𪜈群臣ニハカニ志ヲ変シ昨日ハ相
良カ門ニ立シヤカラモ今日ハ隆房カ庭ニ賀ス上トナク下
トナク皆陶カ猛威ニシタカウ爾シヨリ隆房王莽董卓カ威
ヲフルヒ曹操カ孤ヲサシハサムニ齊シ忠臣モ目ヲ張リ胸

ヲサスルトイヘ𪜈如何トモスルコトナシ剰群兵ヲ卒シ君ヲ襲義隆一生萬死ニノカレ長州ニ出奔シ居ヲ大寧寺ニ移サル陶尾張守隆房諸卒ニ下知シテ曰ク凡軍ノ法ハ北ヲ追ヒ急ニトリヒシクニシクハナシ餘スナ漏スナモノ共トテ大寧寺ニ押ヨセツイニ義隆ヲ弑スコヽニ侍臣笠井帯刀左衛門尉正盛ハ義隆ノ命ヲ請テ公方義燵ヘ奉使ス中國ノサワキ陶カ返逆ノ丁早打ヲ以テ急ヲツケシカハ義燵ニ暇ヲ乞日夜ニウチ下ル両脇ニ戟ヲ生セサルヿヲウラミ飛カ如ニシテ防州山口ヘカヘリ君ノ居所ヲミシハ殿堂門廡皆煨燼トナリ土荒人希ニシテ咸陽阿房ノ三月ノ火保元平治ノ亂後モカクヤト思フハカリナリ適々事トウモノトテハ曉ノ風殘月花清ノ舊跡ヲ照スニヒトシ正盛悲歎ノ泪ヲ流シアナアサマシ關西菅領累代弓馬ノ名ヲアラハシタル名家一朝一夕ニカクナラセ玉フモノ哉此日何シノ日ソヤ嗚呼カナシイ哉天カ命カトテ手ヲカヘ胸ヲ打天道モノシルヿアラハ我志ヲ考ミ逆臣ヲ亡シ君ノ御憤ヲヤスメ冥土黄泉マテモ臣カ忠功ヲ感セシメ玉ヘトテ歎クニ泪ツキ嗷フニ聲ヲウシナウ旦ハ我カ妻子ノ行末ヲサヘ聞子ハ先我領地

ヲサシテ帰リヌ毛利右馬頭元就コレヲ聞テ密ニ々子キ相
カタラハレケル然レトモ正盛ハ元就ト志ヲ通シテワサト
毛利家ニ服セス陶ニ従テ元就エ内通シ籌策ヲ以テ隆房ヲ
嚴嶋ヘヲヒキ出シ元就大勝ヲ得タマヒ陶氏ヲ撃亡シツイ
ニ主君ノ讐ヲ報シケル

雲州ノ尼子ト藝州ノ毛利ト相戦フ尼子カ將山中鹿之助ハ
勇類ヲ拔カ人ニ超タリ尾州ニ往テ救ヲ請フ信長其時明智
日向守カ家士野々口丹波未疾助ト云シ頃山中カ旅館ニ至
リテ倍臣ノ身トシテ申ハ恐レ入テ候ヘトアハレ茅屋ノ中
ニ駕ヲ枉フレ候ハヽ辱カルヘシト請求ム山中過分ニ候可
参トテ許諾ス斯ル處ニ明智今日風呂ヲ焼候ハシト云ケレ
ハ山中御家來野々口ニ先約仕タリト打笑フ明智モ又俱ニ
笑テ雁一翅鮭一尾ヲ以テ山中ヲモテナセトテ野々口ニ與
フ野々口山中ニ對シテ小臣不肖ニ候ヘトモ時ノ仕合ニテ男
役ヲ勤タル了三度也然レトモ敵ヲ突留首ヲ取テ後夢ノ覺タ
ル如シ其場ニ於テ目ニ見ル處朦朧トシテ首尾分明ナラス
一度心ハセ有者モ敵ノ働自分ノカセキ其次第ヲ一々詳ニ
語リ候ハ生得ノ勇ニヤ不審ニ候ト問フ山中感シテ御邊ハ

偽ナキ人哉詞ヲ飾テ虚名ヲ取ル者蹈誥タル所少キ物ニ候
御邊ノ志ニテハスヱタノモシク候我今迫ニ首供養シタル
事二度也始鎗ヲ合セ首ヲ斬ル事四五ノ間ハ我モ又御邊ニ
同シ七八度ニ及テ夜ノ明タルカ如シ十度ニ餘リテハ平生
ニ不遵敵ノ内曹突能見ヘテ兒戯ニ均ク候故以挺打僵ツヘ
シ御邊未壯年ナリ首數累ラハ我言フ所ヲ思ヒ合セラレン
トソ語リケル

武德大成

同年福釜ノ砦ヲ築テ酒井左衛門尉忠次ヲシテ守ラシム大
久保五郎右衛門忠勝渡邊八右衛門莧助太夫正重杦浦八郎
五郎大原左近右衛門阿部四郎五郎忠政大久保治右衛門忠
佐加兵タリ織田信長部將柴田權六勝家荒川新八ヲ両將ト
シテ二千餘騎卒テ來リ攻ム我兵砦ヲ出テ防キ戦フ丁數刻
渡邊八右衛門尾州ノ先鋒早川藤太ヲ射倒ス大久保忠勝ヲ
ツク阿部忠政柴田ヲ射倒ス柴田カ家士來リ救テ馬ニノセ
テ退ク大久保忠佐共ニ追テ馬ヲ突ク柴田僅ニ死ヲ免テ逃
去ル荒川新八郎兵士ヲ勵テ曰柴田傷テ退クトイヘ氏亂兵
氣ヲ失フ事ナカレ我ニ從テ戦フヘシトテ衆ニ先達テ進テ
壘ニ登リテ攻撃我兵力戦シテ是ヲ防テ斬獲スル事數十人

敵兵既ニ疲レテ戦ヲ止テ尾州ニ帰ル

武德成業卷之一終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan